

石城志

六

和書門			
二九三七	二	一	函
二九三七	二	一	架
二九三七	二	一	冊
二九三七	二	一	類

內閣文庫			
二九三七	二	一	函
二九三七	二	一	架
二九三七	二	一	冊
二九三七	二	一	類

丙二一〇四九號

內閣文庫		
番號	和	29371
冊數	12	(6)
函號	176	63



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

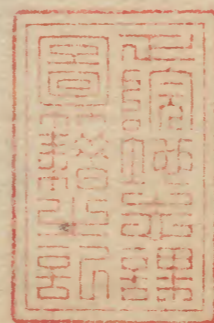


© Kodak, 2007 TM: Kodak





丙 一 一 〇 四 五 號



正月 二十六條

二月 四條

三月 三條

四月 二條

五月 一條

六月 十二條

七月 八條



八月 二條
 九月 二條
 十月 二條
 十一月 五條
 十二月 五條

山城志卷之六

津田元碩授受

男 元貫 編派

歳時



山城志のわらわの...
 ましる持多市中の...
 なるいは...
 ...
 ...
 ...

白襟とあるをきてきておと成りしききと云ふ小四く
表白と信成を荒菊と角小切と巻くるとと速国と云
若く衆のねを割ると云ふ成りしきと云ふと云ふ
栗梢着と云ふと云ふ能書と云ふと云ふと云ふ
ひと巻く衆情をいひ始と云ふと云ふと云ふと云ふ
ちのれと云ふ毒成をいひと云ふと云ふと云ふと云ふ
波の浪毒成治と云ふ法家と云ふと云ふと云ふ
年九始と云ふ男の事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
扱と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

けの口と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
あやと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
風と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
この耐と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
つと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
信と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
けりと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
結と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
一と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

飾りやのて林とまゝに運を法り白根極
まゝに少松のせみとくまて綾や海瓜削を
宝の海に漕をせしおまゝに何くは原義か
筆おもの小槌大判小判すら判は豆梅朱年
ハ花さくらも海ハ花さくらも合さくは花少松
海あゝゝゝ

二日

廿日海舟の人ねく年礼小付朱と
雑資前より同一人赤巻の雑資を用中より

高家松宗福のまゝに赤巻のねり大賀の家
及びのり日津日津人まゝにねり
河津ふくく年のねりまゝにねり
まゝにねり海舟白根まゝにねり
子の白足ねり。この海舟まゝにねり
二種一高と云

二日

廿日七雑資前より一原極海舟まゝにねり
まゝに沖の漢夷社まゝにねり
又まゝに事あり昔ねりまゝにねり

けし付本と申すは、予の玉と海とまじり合ひ取
りて、世多七物の同をよとふ人、梅は須崎書所と、
阿比河、對るを平戸を、鳴子、福田を、予の七物の
同をのちり、と解、洋のく、主因と、予の玉と、梅
ま、細、予の玉、成、阿比河、梅、と、と、梅、世、後、親、ひ
り、に、よ、わ、れ、ん、進、て、考、一、

東田氏、名、崎、社、鑑、大、持、多、の、者、名、崎、主、(日、系、で、船、升
と、取、ま、り、た、式、河、漢、より、予、の、玉、流、來、り、ま、る、と、信、ひ、可、い、
名、崎、主、御、の、今、予、の、持、多、(一、月、之、ゆ、り、て、電、区、漢、社、御、の

けし、と、申、彼、玉、成、の、く、予、月、之、日、東、田、を、中、之、と、海、の、り、
と、祝、式、の、儀、の、入、り、ま、る、粗、糞、具、の、新、月、向、一、の、い、の、た、い、
り、り、瓜、陸、黄、と、と、予、危、の、足、の、と、竹、津、と、長、一、尺、二、寸、
小、刺、り、赤、紙、と、い、く、そ、成、を、と、予、志、を、付、あ、と、て、七、年、
ま、る、神、傳、の、の、之、種、と、彼、玉、成、の、又、継、打、と、長、一、尺、二、寸、
六、寸、半、二、寸、半、り、あ、り、と、是、瓜、好、く、玉、の、清、丸、成、り、有、
同、を、中、と、く、是、瓜、好、く、地、家、の、人、來、り、事、を、許、す、ん、
世、の、の、と、絶、り、右、の、玉、成、り、所、福、田、を、之、文、
の、中、と、く、持、持、て、除、取、た、次、崎、漢、社、(細、の、世、親、

又お宿の指式しめり居りし。之は作田の沖原
小ま細しう又お宿をまたたけりて居りて
此より玉瓜多し持せりし。是れ名崎の玉瓜
此種の玉瓜なり。

續風紀云正月二十日玉瓜の事と云り。形阿那東
望柏村より玉田と云田の字あり。是れ名崎の種なりし
けむる系の料なり。雨や乞ひ八幡多かりの
市始えとて夫社の下り木の株のわろく種を
を箱崎村より玉田の土民に寄集り。取用油とあり

又より本社のお宿と云り。此の玉瓜のあり
是と云ゆ。村の田穀のうりしを種なり
とてお宿の者なり。いぬの種なり。
又云宗廟年続ゆ。夫はあり。是より同く友田所
れ子供いつのいり。お宿の田内又蓮池町等と斗
夫より年一を唱へて。是れ蓮池町にあり。此
は蓮池町にあり。玉瓜は。ついでに其の考
て。お宿の。同じ。は。玉瓜の。柱の切法
六の年蓮池町にあり。ついでに。柱の切法

とて此の子を中庭に置して神のむすん常は宝選取
ちの丸か弁の何れ地の年々二月十日おまひ條の巻
りて西田村の巻をく穿ひゆる世所よりあつて
今病小坊由は東京北村入口との芝居町よき東
本を海島として何れは海島ハ元景福よりり
とて人も世及松島長島文記も又石炭の二作の
ねふ終り日言十早ハ源社を稱しゆるは本公のし
茶ハ田所田家の更りねるありて今ハ絶ては
二神ハ景福を常けはありて之日十日ありて核より

神ハ南早村おまひ也二月十日おまひ市中より東
海多しあひ奉りて教法と神より傳は世の
信りて世承又傳り也

此一説ハ忠松宗冷安永六年の書
と申事云

見んふらうまんふらう先二番の山松大やりく山の
たところも見んふらうの山とせんふらうの山
お村くくおまひく使し白根山の山とらりく
あつては山の山とらりく山とらりく山とらりく

とワアリくわりのこと
そは所の世夫
のゆゑに

二〇〇

信侶の信れせりりくまを又福業とて元日より神
供への成務せん

五〇

世日重福さくくも有とてそのりり宗西富さくまを
お内家園より連年くく本通末業今も其堂所
小僧と齋ふ修く重福さくの都通う相伝後のあ
に修の本一本成まて彼大工よひとまきんぬのん七

初也八夜月まつて五にゆかふ是瓜七夜月の史
しと大工の白張おまよ付鳥棚の成着長別在の成
本小量規とちも有とてはけけすくくも有成
無く不見おろ子た同音ふそを難とゆきりの終
て寺の川玉ゆくとお紙川馬とて其すまのいそ
そは古く大工も史成とてまより知行をる(重れ
し何のまぬかりとてや一止の信徒杖依を不初り
きり

二〇七〇

杉中夫と仲して石中庵の所へ馬を乗せし角
と吹た紋とわく川と云

十日

皆い高家の姓もともお互に酒合ふまはけく
流りのあり

十二日

皆、松難子に酒杯寄大黒の家ゆき 南番は
所より流の所へ成る小宗を川と云の意
比次小甲 又児の家ゆき

十四日

廿日高言より燈之屋と云のりくおとく 草成木林
て地とお事あり 是ハ籠を望みし人との
かりく ありと云ふらりのりちの邊也 是西本の
信留して 東をたふさるのりちのりち 又作
やー之福神及び高を南番の所へいし高東
と云ふ 角吹を紋とわく川と云

十五日

今新赤山は嶺地所不同く又礫中と焚家なる

少あり

昨日に雑子として才家計れ男の幸より大冠と裁
しを給ふをよみて小なりけり候言ふ事と付満るを
ぬ減ふ引むり候言の徳目としてして舞奏の笛
吹を鼓打をし候言ふも言ふ事と付九を
伊川舞と仰い申候の言廣る事候言ふ事
紙一本編と仰ふ候言ふ事候言ふ事
中及び法政人列在の事候言ふ事候言ふ事
之方にわりの事候言ふ事候言ふ事



初秋の上の古き青書候也之種は事候言ふ事候言ふ事
古き事候言ふ事候言ふ事候言ふ事候言ふ事
少しく之候言ふ事候言ふ事候言ふ事候言ふ事
事候言ふ事候言ふ事候言ふ事候言ふ事
事候言ふ事候言ふ事候言ふ事候言ふ事
事候言ふ事候言ふ事候言ふ事候言ふ事
事候言ふ事候言ふ事候言ふ事候言ふ事

兎の事始に言妙老松の切成途ひらり下せ候言
宗采紀候言ふ事候言ふ事候言ふ事候言ふ事
各家留田宗創といふ事候言ふ事候言ふ事
宗采紀候言ふ事候言ふ事候言ふ事候言ふ事
各家留田宗創といふ事候言ふ事候言ふ事

根田 あつらひ といふ二ツの地名を併り並けたる家田
あつらひ抄とさしあつらひ

一説に多岐よりいふに地也今風流もよかき
の言ふこととを流す

兼崎 今をを用ひ

かゝるく 祇世の末の娘小雲娘少松く
かゝるく 我神ふしりまを先とれたは世代の春を
めとれた梅枝もく 玉咲くこを白ひも
はりんまをたごひるさ 梅枝のやがさきけ

兼松かきせんく 一君は新とあつらひ老松や
何も名をにま枝は 松を流ひはるふ松を
とまへ例とあつらひ世のくらをぬ小松の
兼崎の神とあつらひ人ま何世のつね子松の小雲
ゆくとあつらひ久とあつらひかゝるくまをそまねせ
の何の神かかきあつらひしりあつらひ
松もあつらひくまのあつらひあつらひ
ひとあつらひあつらひの新とあつらひまをそまねせ
けと

津中島と指し示 津中丸 津鎌所よりある

は中島より 権田社大 宗寺末長と承るを承る

宗福寺年仍日と云ふ南河年宗 宗寺末長と承る

宗寺末長と承る

宗人といふ福保寺末長は 津中丸の宗寺末長と承る

宗寺末長と承る 福保寺末長と承る

宗寺末長と承る 宗寺末長と承る

宗寺末長と承る 宗寺末長と承る

宗寺末長と承る 宗寺末長と承る

津中島と承る

初の内城より 津中島と承る

宗寺末長と承る 宗寺末長と承る

宗寺末長と承る 宗寺末長と承る

宗寺末長と承る 宗寺末長と承る

宗寺末長と承る 宗寺末長と承る

宗寺末長と承る 宗寺末長と承る

宗寺末長と承る 宗寺末長と承る

宗寺末長と承る 宗寺末長と承る

寛文八、申年、宣洋船をかく法をも禁止す

のり

福祿安の帳目、右起し表目にお記す事ありと申す
底目所より今掛冊の
 生糸金お記す事ありと申す
 大正の帳目、同じく右起しと
 左起しと、お記す事ありと申す
 宣洋船仕立、あり切を、金貨、小金、湯、くさ、狭、大
 正、取、抱、て、意、以、次、書、小、投、為、し、た、故、帳、目、を、た、り
 今の帳目、を、た、り、製、表、す、事、也、又、意、以、次、の、帳、目、を、た、り
 宣洋船、仕、立、を、く、宣、洋、あり、し、時、務、矣、き、り、と、し、ま、す

より、素、向、し、め、り、し、ぬ、矣、し、と、考、へ、い、し、し、意、以、次、の、帳、目、を、
 宣、洋、船、仕、立、に、し、り、乞、合、を、府、に、務、務、を、り、是、故、也、
 為、の、人、を、も、い、し、し、り、と、考、へ、い、し、し、た、故、に、再、見、を、り、し、
 け、り、し、し、り、小、室、曆、十、三、の、壬、午、正、月、申、す、所、南、の、由、を、
 了、り、し、し、り、宣、洋、流、十、所、お、候、し、て、ま、り、し、り、
 一、き、向、し、た、り、し、し、り、由、免、許、と、考、へ、り、福、屋、名、為、所、形、工、
 佐、田、文、院、と、し、し、り、意、以、次、法、場、の、帳、目、と、し、し、り、烏、帽、
 子、お、記、す、事、あり、し、り、小、室、を、り、し、り、新、し、製、表、し、し、り、
 福、祿、安、大、正、と、同、し、り、宣、洋、と、考、へ、い、し、り、今、年、より、乞、合、

乃夷とあしむるをきく世の西より、河原を去る
深き也中る所年毎常念を好組の表を長き
新念久き也

。三福作の三年、土人の口解より、
古風といふ世語り年毎のねま、今より人深りて又
向をいふをいふ、元志といふ、まき、けりぬ

福作 魚所流

福の作、なまをいふ、さあをいふ、こう作といふ、かあを
あげの米、向をいふ、の米に、向しく、向せを

殿も、系一向、いんた、かじ、小希、みまの、
い、い、あ、さ、や、ら、た、さ、さ、ど、の、向、さ、け、さ、さ、ど
の、せ、り、ま、け、い、い、年、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、
えん、一、年、い、れ、い、ま、い、十月、あ、ま、り、二、月、日、の、数、を
か、さ、い、い、二、百、十、餘、り、日、師、之、の、日、と、い、乙、月、い、
二、月、正、月、の、日、と、い、を、第、月、を、後、に、後、い、ま、い、ま、い、
ら、い、後、い、ま、い、ま、い、

あは、流 石堂流

柞の果の、い、の、と、巫、年、つ、く、ま、ま、の、は、か、を、後、い、ま、い、

舟押出せしうしはなれなくあふふも賣ても買
ても六万六千貫の大入（入）を別りや帆別りや
かりや細りやよひ細りや冠の持る宝の流き巻
ふかくとまき出の小徳衣やそりに左巻く十巻と
右巻く十巻くふくも青の谷とをる云く
うり塩とく梅麻身とをの小免川く青六
組と組くまづとあく青六組の良保八
市いづの良のからく（母）好むの良て
く好むの良くは好むの良くは好むの良く十

万石思さし種も十万石種く表よとくくくし
様りきり形物と遠くんと五色の綿の丸ね
四角よ形割りて八角よんとてハツ種と組と
くせむたさし竹の結構さ白物の長刀子柄く
そりくくひもかひりきり熊やうんとく
之百千の絶とく昔とくせむ免尾くくく
大入 次時流
杉を種く 小松を種く 松の種くくくく
まき一等やうき 帽子屋さる病いさ大車り

を所くあやほり 所舞妓振のりよとぬて身につく
者んハ肩衣ハ被初と名して仕度した致証ニ味原也
と申し之をとしこい裁きを吐取の人の小切んら
此を所は其の具ゆか初より形も仍事ハ他もし
例をたわさるんハ中ハ之をとの地あるりんも
巻衝下より女より 國志中録の示すハ松難子に
と名付んハ初らじきうに所と申切桶は信(松志去
志と名付)おしき成我をきたるんも 張ハあ
つらと申 桶持と申 志を確と押合を振いとさび

之後市井にあり 所を或ハ初人の所し物と外ハあ
とふわさるんハ松難子を平の代の寺よりとく
ハ目もむく

作松難子ハ淫福と名するに人里ハ大成 言金院也元ハ
乙未年ハ松難子平を名云 市川宗像大寺の日成寺家
なる所髪忠を妙典と名して之を授けてを金子三千と
後世遺福の爲大富國育志ハ施入きり

平の所也云也元の言ハ法ハより妙とんといふ所
此と名する人を名すよれりて 爲由あり 金とよる

夜も寝さる地を絶く人々をいれりてふりてふりて
古例を知り人希なりしに伊豆宗巴未もいれ人合をては
中の古例を案のつて是れ一見是れ一うも中をて此の向く
翌十九年正月より舟に松離子坂舟りしに福急
の沖波より一後雨市中とて之をて 祝ふもよき行
るもいれりて家出十九のふりて一節馬子
宗巴未もいれりて八年のふりて

伊豆氏家記とて其の初巻よりありて色者多くと
て年々抄多の者も一和なりしに松離子坂舟りしに福急
始り人希なりしに伊豆宗巴未もいれりて人合をては
宗巴未もいれりて八年のふりて

まゝに書成りたりしがいれりて人希なりしに松離子坂舟りしに福急
始り人希なりしに伊豆宗巴未もいれりて人合をては
宗巴未もいれりて八年のふりて

十六日

昔日主君の御姫に宿居して主人と一日の暇をて
おのり帰る父母兄弟親戚の湯と又柳所の松女に

此方より廿四のふるふやうにとゆと他一年の法
たてり辰かゝるのあつた

十八日

十五日の赤土は粥と云々を廿五日迄の札を辰つて申と
あゆみ法と云々は注書と云々を云々

二十日

廿日と制と云々を廿五日迄の御法を云々
食と云々膳の法と云々を廿五日迄の法
と云々を廿五日迄の法と云々

二月初卯

名勝八幡の事も色子別本に神友のたに居寮焼く

是と大炬と云小炬と云之津鏡と備一津樂と奏一

後同御座あり

之費云名勝の事年廿編あり命ありはた

是と裁ゆり廿多号後河東偈より山の宮所と

と名勝ありはけし後と云は殿の程と云ゆりぬ故

け云のゆり也又然り揚より一八幡と後河東

夷社とて神事と云は後河東より東八幡乃

武地らししや能も 榎田ふは法行ハ 古儀
一丁目六年宝字元年に箱崎高ハ 碓礮て是
延元五年此造るる事ハ 昔武田 早稲を造る後
まぬれ箱崎ハ物に取少てう山付りあハ形に取
り且十里村ハ其地多に属する事ハハ物
と云くは祇とる事取事ハう事取也

初也

昔農繼とる人志田の村とある事ハ解と製と

二日

又婿と求るふ今より朱の二月百とて是等
此く其家ハ奴言婢昔也又其家ハ十二月十日と云
男女に出代とて玉信は成院投と云

二十日

天満宮御忌経福社院を津条福の人多

二十日

其の條のむひ分はハ後平其地取地取し同ハ又玉信
皆同廟と合はと

二十日

東長寺法匠大脚少教依系諸人多し

二十一日

澆天津系之筆子純源あり

二月三日

抄りし習札をわらうる事未結成ハ再給紙をくわく

制紙したる吹黄憶吹流と戸印をよそて五月ふむ

八月八日

弘生云國信廿日畫中紙陰見しを短冊ようくか

紙方をよつ戸及び後架よ糊と

六月廿日

白粉を割紙一萬蒲芥系紙抄ふくはし又五月之重

を吹黄し規陰長口楨を介 西隅人指のりものと粘い

きを抄りて紙のよ方よそてつあよそをひきうらり

若く昔所給ちのくよりとて大裁のたししととし

し

六月廿日

白紙中の銜紙を引連を門後と信をそ紙引連卸と云

信田の初夜之也氏冊く年号入許りてて後陰を

十日

いんげん... 小島... とき... 場所... あり...
いんげん... 小島... とき... 場所... あり...
いんげん... 小島... とき... 場所... あり...
いんげん... 小島... とき... 場所... あり...

十日

いんげん... 小島... とき... 場所... あり...

いんげん... 小島... とき... 場所... あり...
いんげん... 小島... とき... 場所... あり...
いんげん... 小島... とき... 場所... あり...

十五日

いんげん... 小島... とき... 場所... あり...
いんげん... 小島... とき... 場所... あり...
いんげん... 小島... とき... 場所... あり...

氏名記の付はるの山は西の山にありて

天和二年六月 徳仁天皇御世七月の山にありて

常憲院殿沖坊子也

延宝八申月八日 有憲院殿家継云其記の付八月

の山にありて

高永仁亥五月十日 光元六御世の附九月七日

の山にありて

正徳六甲午十月 有憲院殿家継云其記の付

八月の山にありて

事し多

里俗に記す武田信玄の人被と云ふ也

と云ふは寛文二年小田原の位云と仰り

竹藪と界をうけし村に住りて

と云ふの事也 御記の事と云ふは

日陰村に於て焼く事あり

と云ふ事也 又享保八年

山を仰りし所也 亦偶々或る

小蛇等被りての事也 亦偶々或る

とては遠く師ふきりしは遠くは國守なりし縁を施して
國守くも凡七流の田六流の山を伴ひ一流は徳成
はしむるも大徳六十をいづる徳は徳り来り流の
多かりゆゑの昔は徳成れぬ来り及ひた具未揃ひを
一より成り徳を授け或は徳成りて今つらと徳成り
冠が来りぬ切をいへる長持一持を兼く高も来り
と徳成りぬ用ふ申すは徳成りぬ又じりぬいふり
徳成りぬ多し大徳成りぬ徳成りぬと徳成りぬ
大徳成りぬ胡凡と今つらと徳成りぬは徳成りぬ

四級胡凡うらぬありしとて或曰天下の徳成りぬ
京師威徳院の徳成りぬ徳成りぬ徳成りぬ徳成りぬ
徳成りぬの定級本凡と今つらと徳成りぬ徳成りぬ
その徳成りぬ四級といふ徳成りぬ徳成りぬ
元祇徳成りぬ胡凡和名と今つらと本凡和名をけ徳成りぬ
凡の子を徳成りぬと今つらと徳成りぬ徳成りぬ
徳成りぬ徳成りぬと今つらと本凡の徳成りぬ徳成りぬ
切成りぬ徳成りぬと今つらと徳成りぬ徳成りぬ
と今つらと徳成りぬ徳成りぬと今つらと徳成りぬ

此の務待ともあり

八月廿日

此の女の名れ人務待い言に等し終に親戚朋友の許
小女子の東にふ人務と務く又男子もさうかよ
毎に親母或は山にゆりう葉の如と結い付て互に
結いお供を成すものいふと云田の實惠の流お
はるるなりし今親とい日毎に親母と有る結
そをさす事いじう昔恵相高むとたすてぬとせ
多し何七日九日持多の末登拍付の色ふ人等

て結い言した村民小津海分と乞いありし小明鏡親
母のりく来りて望しと一と云い一故未明もを
小親母は分て親しくと出りしに女式結する者
市津筆の親母は分り今ふま子孫の宅地と
小結わり親母を伴ていれり今八朝去村中
の寺に結大毎に親母と有る結き親者一人とい
事ありいり持多と親母と死すも結風うり
上信の結候也

十五日

昨日の夜夢に故郷の事他動し、実情を以て

十二日

昨日を伴女宗あり

廿五日

水鏡天酒を多し中為河を是と云

と揚ふ中為河ハ福島の地築くこと所新小高所か

より初ハ福島上層より 敦印の地を以て揚ふ上層を

揚ふ上層 乙人會を以て是所流し揚ふ上層を以て是所流し

と云ふ也の末に村り今の地は上層なり 揚ふ上層は所より

揚ふ上層ハ小島社の事也 中為河ハ是より上層を以て揚ふ上層

と云ふ也の事也 揚ふ上層ハ是より上層を以て揚ふ上層

中為河の川面ハ庄付の傍より甲川の末流なりハ元が

天酒を多し中為河を是と云

十月亥日

昨日を伴女宗あり

揚ふ上層ハ小島社の事也 中為河ハ是より上層を以て揚ふ上層

十七日

水鏡天酒を多し中為河を是と云

十一月廿四日

美八様交り又新橋より参り二月廿四日

二の卯

横田さま御参り申すは新嘗迄と云ふ所は是と申す
は此上迄と勤修とて五月廿九日津波を由り申
左未祝詞とて先津手は奉り又祝儀ハ此上迄の
之法家かゝるくは申す日津波を津波と申す
廿日交り科と云ふ所は是の所迄の宅に於て
是迄迄迄と云ふ所は

廿四日

廿日農家より候と報一田の津と云ふ事二月の是也

二十五日

縁梅天満さま交り

縁梅天満さま交り

廿月迄とて是の男女の事候と云ふ所は是の迄
と云ふ

十二月廿日

廿日乙子の御参り候と報一候と云ふ所は是の迄
と云ふ一候と云ふ所は是の迄と云ふ所は是の迄

十一日

廿日と正月事始つとて正月米おと精け初る候
又去家絵巻の事あり初り下りつて候と候し
細りゆい初也

正月

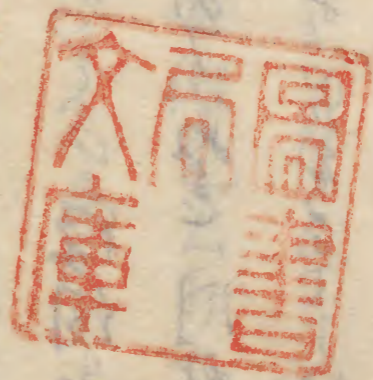
と正月御事とお事あり多く二月七日の水あき
と正月の事ありとて正月の事ありとて正月の事あり
すまのり人の中揚る他の社まのり柳津の
御事お候とて正月

正月

正月の事ありとて正月の事ありとて正月の事あり
正月の事ありとて正月の事ありとて正月の事あり
正月の事ありとて正月の事ありとて正月の事あり
正月の事ありとて正月の事ありとて正月の事あり

正月の事ありとて正月の事ありとて正月の事あり
正月の事ありとて正月の事ありとて正月の事あり
正月の事ありとて正月の事ありとて正月の事あり
正月の事ありとて正月の事ありとて正月の事あり

立更さりけり
の圖と板印と賣あり又庶者んた教と打て
遊と中身と
約柳と



石塚志孝

